

久留米大学 バイオ統計センター 公開セミナー

対面形式
&
WEB(LIVE)
配信

吉田勇一（久留米大学大学院 医学研究科 博士課程4年）

「脳卒中患者の運動機能を改善する理学療法の効果」

理学療法の量と強度は運動機能を改善するための重要な要因として知られており、理学療法の時間も運動機能改善に影響していることが推測される。しかしながら、日常実施されている理学療法の時間と運動機能改善との関連性は未だ明らかにされていない。本セミナーでは、起き上がり動作を運動機能の一指標として、理学療法の時間配分が及ぼす影響について考察する。研究デザインは多施設共同の前向き観察研究、対象は2020年4月から2021年3月にかけて回復期病棟で理学療法を受けた脳卒中患者106名とした。13週間の理学療法の前後で背臥位から座位への起き上がり動作の時間を測定し、短縮した時間割合をエンドポイントとした。また、理学療法を①理学療法なし、②静止姿勢での準備運動、③日常生活動作の練習、④歩行練習、⑤特別な機器による練習の5つに分類して、理学療法士の記録から各カテゴリーの時間を得た。エンドポイントとカテゴリー時間に関連している要因を選定するためのスクリーニングにより、理学療法実施前の起き上がり時間を交絡因子として同定した。多変量解析により得られた交絡因子を調整した予測式から、日常生活動作の練習時間を多く配分した理学療法は、起き上がり時間をより短縮する可能性があることが示唆された。

木原康宏（久留米大学大学院 医学研究科 博士課程4年）

「急性胆嚢炎の併存が胆嚢癌手術後の予後に与える影響の検討 ～Propensity score analysis～」

胆嚢癌はその診断、治療時に急性胆嚢炎を併存していることがある。本研究の目的は胆嚢癌手術時の急性胆嚢炎の併存が手術後の生命予後に与える影響を明らかにすることである。単一施設の過去30年の胆嚢癌手術例をretrospectiveに解析した。胆嚢炎併存の有無で2群に分け、患者背景としての臨床因子を傾向スコアとして算出し、解析に用いた。急性胆嚢炎の併存があると手術操作で術中の胆嚢穿孔が起こりやすく、癌細胞を含んだ胆嚢内容物が腹腔内に漏出するため、再発が多いと考えられている。本研究では術中の胆汁漏出の有無も傾向スコア算出の共変量に含め調整し、胆嚢炎の有無での予後に与える影響を解析した。傾向スコアを用いた解析として1:1マッチング、逆確率重み付け法(IPTW)、truncated IPTW、を用い2群間の生存時間解析(OS、RFS)を行った。218例を解析対象とした。胆嚢炎併存群(37例)は非併存群(181例)と比較し、傾向スコアを用いた全ての解析においてOS及びRFSが有意に低い結果であった。Cox比例ハザードモデルにおいて、OS、RFSにおける各解析で、胆嚢炎併存群は死亡および再発リスクが高かった。胆嚢炎の併存により胆嚢癌手術後の予後にnegativeな影響を与える可能性が示唆された。

2023年4月27日(木) 18:00~19:30

久留米大学バイオ統計センター【コンピュータ室】

福岡県久留米市旭町67番地

申込方法

下記URLまたはQRコードより、前日10:00までにお申込みください。

<https://biostat-kurume.stores.jp/>



お問い合わせ

久留米大学バイオ統計センター公開セミナー係

✉ biostat_seminar@med.Kurume-u.ac.jp